

令和8年(2026年)

2
No.832

The Religion News

宗教新聞

<https://www.religion-news.net>

発行所 宗教新聞社

〒160-0022 東京都新宿区新宿5-13-2

電話 03-3353-2940(代)

FAX 03-5363-5182

郵便振替口座 00130-9-22704

©宗教新聞社 2026

購読料 (税込)
1部 半年 年間
500円 3,000円(元共)
6,000円(元共)

新成人、伝統の「通し矢」



新的に狙いを定める晴れ着の新成人は、1月18日、京都市東山区の三十三間堂で行われた大会で、成年式に参加する。

京都三十三間堂で大的全国大会

1月18日早朝、京都市東山区の三十三間堂（妙法院蓮華王院門跡本堂、杉谷義純門跡門主）で、成人式にちなむ恒例の「通し矢」が、妙法院と京都府弓道連盟の共催による第76回「三十三間堂大的（おおまと）全国大会」として、男女約1900人が参加して開催された。三十三間堂では江戸時代、武士が南北に長い堂内の軒下を、端から端まで射通す矢の数を競った「通し矢」が行われていた。

試技に先立つて大会名は、伝統の大的全国大会が今年で76回を数えたことを喜び、若い人たちが精進を重ねてこの矢場に立てるようになったことを祝し、感謝の想いで臨んで欲しいと挨拶した。

そして大会の無事を願つて杉谷門跡門主以下僧侶によって加持が厳修され、矢渡（やわたし）の儀が、京都府弓道連盟の千田寿男会長によつて執り行われた。

試技が始まると振り袖袴姿の新成人たち8人ずつが、南北に長い三十三間堂に平行して設けられた矢場の脇に上り、横一列に並んだ。矢をつがえて的を見据え息を整え、右手を振りかぶつて静かに弓弦を引き絞つた。的を見定めた後、矢の先をわずかに上げて的の少し上に狙いを定めて射ると、矢は底冷の京都の冷気を裂いて次々に的に向かつた。

東山区の三十三間堂で、

2017年（平成29年）、45年にわたつた千手觀音像全ての修復が完了し、本尊の千手觀音坐像をはじめとして千体の千手觀音立像など堂内の諸像すべてが国宝である。

三十三間堂の通し矢はもともとは、長さ約12

1メートルある本堂西側の軒下で、矢を南から北に射通す弓術の競技だつた。平安後期の保元9年（1156～59年）に始まり、江戸時代には、武士が軒下で夜通し矢を射通すことができた数を競つた。縁の北端に的を置き、縁の南端から軒天井に当たらないうように矢を射抜いて、その本数を競つた。一昼夜での通し矢数を競う「大矢数」の記録達成者は、「天下一」と称されたため、各藩の弓術家が腕を競い、京の名物行事だつた。

現在では、新成人女性の多くが振袖袴姿で行射する。なお、60メートルに10段の階段状の長大な仏壇が設けられ、千手觀音像（鎌倉時代の仏師湛慶作）が安置され、左右の多くの振袖袴姿で行射する。なお、60メートルは弓道競技の「遠的」の射程であり軒高による制限がないため、江戸時代の通し矢の風景と全てが同じではないが、今でもこの「通し矢」は、弓道を志す若者のあこがれであることに変わりは無い。

2017年（平成29年）、45年にわたつた千手觀音像全ての修復が完了し、本尊の千手觀音坐像をはじめとして千体の千手觀音立像など堂内の諸像すべてが国宝である。

三十三間堂の通し矢はもともとは、長さ約121メートルある本堂西側の軒下で、矢を南から北に射通す弓術の競技だつた。平安後期の保元9年（1156～59年）に始まり、江戸時代には、武士が軒下で夜通し矢を射通すことができた数を競つた。縁の北端に的を置き、縁の南端から軒天井に当たらないうように矢を射抜いて、その本数を競つた。一昼夜での通し矢数を競う「大矢数」の記録達成者は、「天下一」と称されたため、各藩の弓術家が腕を競い、京の名物行事だつた。

現在では、新成人女性の多くが振袖袴姿で行射する。なお、60メートルは弓道競技の「遠的」の射程であり軒高による制限がないため、江戸時代の通し矢の風景と全てが同じではないが、今でもこの「通し矢」は、弓道を志す若者のあこがれであることに変わりは無い。

2017年（平成29年）、45年にわたつた千手觀音像全ての修復が完了し、本尊の千手觀音坐像をはじめとして千体の千手觀音立像など堂内の諸像すべてが国宝である。

三十三間堂の通し矢はもともとは、長さ約121メートルある本堂西側の軒下で、矢を南から北に射通す弓術の競技だつた。平安後期の保元9年（1156～59年）に始まり、江戸時代には、武士が軒下で夜通し矢を射通すことができた数を競つた。縁の北端に的を置き、縁の南端から軒天井に当たらないうように矢を射抜いて、その本数を競つた。一昼夜での通し矢数を競う「大矢数」の記録達成者は、「天下一」と称されたため、各藩の弓術家が腕を競い、京の名物行事だつた。

現在では、新成人女性の多くが振袖袴姿で行射する。なお、60メートルは弓道競技の「遠的」の射程であり軒高による制限がないため、江戸時代の通し矢の風景と全てが同じではないが、今でもこの「通し矢」は、弓道を志す若者のあこがれであることに変わりは無い。

天地

先月末、実家に帰省した。一人暮らしをする高齢の母親の様子を確認するためである。身体面にはさほど問題はない母だが、さすがに日常生活に支障をきたすことが増ってきた▼多くの日本人にとって介護は喫緊の課題だ。例えば介護を理由に離職した人は2024年に約9万3千人（厚生労働省「雇用動向調査」）である。家庭での介護はもちろんだが、遠距離介護の場合も医師やケアマネージャー、ヘルパーなどを連携して進めている介護者が少なくないようだ。天地子も身近な人のアドバイスを受けつつ、不十分ながら今後のことをケアマネジメントと話し合っている▼また、介護では本人の自分らしさを尊重し、生きる喜びを感じられるかが大切だと言く。今回の帰省では、ささやかだが「本を読みたい」という母の希望を聞いて、『置かれた場所で咲きなさい』（渡辺和子著）を思いつき、手渡した▼少子高齢化が進む中で介護の体制づくりは簡単ではない。天地子としては、家族の絆と人のつながりを大切にした形にしていかねばと思う。